

プロメテウスの死の先へ ——『フランケンシュタイン』の初版と 第三版の比較研究——

岡 隼人

序論

メアリー・シェリー (Mary Shelley) の『フランケンシュタイン——あるいは現代のプロメテウス』(*Frankenstein; or, The Modern Prometheus*) には三つのテキストが存在する。¹ 1818年に出版された初版、1823年に出版された第二版、そして1831年に出版された第三版である。本論文は初版と第三版を取り上げ比較する。² 第二版はメアリーの意思と関係なく父ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) が出版を取り計らったようであり、テキストとして用いられることはない。³

文学作品が複数の版を持つ場合、どの版をテキストとして選ぶかは重要なことである。殊に『フランケンシュタイン』を研究する者にとって版の選択は避けては通れない道であり、それによって解釈も大幅に変化してくる。初版と第三版は今日に至るまで多くの研究者によって比較されてきた。⁴ 版の選択に関する数ある議論は、両版に大きな違いが見受けられることに起因する。メアリーは第三版に初めて付した序文の中で、彼女が施した変更に関して以下のように述べている。

I will add but one word as to the alterations I have made. They are principally those of style. I have changed no portion of the story, nor

introduced any new ideas or circumstances. I have mended the language where it was so bald as to interfere with the interest of the narrative; and these changes occur almost exclusively in the beginning of the first volume. Throughout they are entirely confined to such parts as are mere adjuncts to the story, leaving the core and substance of it untouched. (1831 10-11)

この断りに反して、メアリーはキャラクター設定や物語の内容にまで踏み込んだ数多くの変更を加えている。例えば、エリザベス (Elizabeth) が初版ではヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) と血の繋がった従妹であるのに対して、第三版ではフランケンシュタイン家に養子としてもらわれてきた血の繋がりのない義理の妹として設定が変更されている。

現在、多くの研究者は初版をテキストとして採用している。ピカリング社 (Pickering) から出版された *The Novels and Selected Works of Mary Shelley* の総合編集者を務めたノラ・クルック (Nora Crook) もまたその内の一人である。“In Defence of the 1831 *Frankenstein*” の中でクルックは、“[d]id she [Mary] transfer sympathy from the oppressed Creature to the oppressing Victor and thus confuse her original conception?” (Crook 3) と問いを投げ掛けた上で、研究者たちによる第三版への評価を次のようにまとめている。“Certainly, that the 1831 *Frankenstein* is both less ideologically clear and ‘a smoother, more sociably presentable work’ — more sexually proper, politically quietist and religiously orthodox — is at present the dominant view” (Crook 3).

クルックによれば、第三版が初版よりも低い評価を受ける理由としては、

メアリーが第三版ではクリーチャーよりも寧ろヴィクターに同情的になっていることで、初版における彼女の元々の構想、つまりヴィクターを徹底して批判する姿勢を不明瞭にしていることになる。しかし、『フランケンシュタイン』という物語の中で我々が問題にするべきは、キャラクターとしてのヴィクターに対するメアリーの心理的な距離感よりも、ヴィクターの内にある怪物的な男性的原理をメアリーがどのように捉えているかなのである。初版において彼女が真に批判しているのは、ヴィクターの内にある怪物性へと繋がる恐れのある男性的原理なのである。だからこそ、ヴィクターの精神を共有するウォルトン (Walton) の野望は最後に挫折するのである。そして、メアリーのこの批判は第三版において不明瞭になるどころか、より明確になっていると言える。

本論文は第三版が初版よりも優れた版であるとする立場で、メアリーが第三版において初版の時点での批判精神をより拡大させ、より明確にしていることをまず証明する。⁵ そして、批判の拡大と明確化に留まらず、第三版にはメアリーの批判する主義・精神とは全く別の主義・精神が提示されていることを次に明らかにする。それは初版に色濃く見られる怪物的な男性的原理の否定を超えたものであると言えよう。これこそが第三版が初版よりも真に優れていると言える点なのである。さらに本論文は、初版偏重故に見逃されているプロットの展開方法とキャラクターの造形並びに心理描写の秀逸性にも、メアリーが施した変更点をいくつか挙げながら言及していく。⁶

I. 二つの主義と精神

『フランケンシュタイン』の冒頭には、その後の物語において道徳的な基

準となる主義・精神を持つキャラクターが二人登場する。そして、第三版で新たに加えられた語に着目することで、その語に関係する二人のキャラクターの持つ主義・精神の対比が鮮明に浮かび上がってくる。北極へ向けて航海中のウォルトンが自身を形容する際に用いる“romantic”という語は彼の利己主義と自己本位的な精神を暴き出す。ヴィクターに出会う前、彼は人類に多大な恩恵をもたらす大いなる目的へと突き進む自分に共感してくれる友が欲しいと嘆く。そして、そのような友を希求する自分自身を“romantic”と表現する。“I desire the company of a man who could sympathize with me; whose eyes would reply to mine. You may deem me romantic, my dear sister, but I bitterly feel the want of a friend” (1831 19). 次に彼は、際限なく広がる崇高な白昼夢を抱く自分を“romantic”だと軽蔑して呼ばずに、自分の野心に「調和」(“keeping”)を与えることが出来る程の愛情を持った友を再び求める。“It is true that I have thought more, and that my daydreams are more extended and magnificent; but they want (as the painters call it) *keeping*; and I greatly need a friend who would have sense enough not to despise me as romantic, and affection enough for me to endeavour to regulate my mind” (1831 19).

ウォルトンによって二度用いられる“romantic”という語は彼に欠けている共感と調和を彼が希求している状態を表す。つまり、欠乏と欲求を示す。彼の用いる“romantic”という語は共感されたい、自分の白昼夢に調和を与えられたいといったように、終始自分の欠乏を埋めるための一方的な欲求を表すと同時に、彼の利己主義と自己本位的な精神もまた明らかにする。

一方、第三版で新たに加えられる“romantic”という語は航海を指揮する船長の愛の物語を形容する際に用いられる。“I heard of him first in rather a

romantic manner, from a lady who owes to him the happiness of her life" (1831 20). 船長は、自分の愛する女性が実は他の貧しい男性を愛していて、さらに父親にその貧しさ故に結婚を反対されていると聞くと、自分の財産をその貧しい男性に分け与えてやり、父親が二人の結婚を許すまで他国に身を隠すことまでする。ウォルトンは彼のことを "a noble fellow" (1831 21) と呼んで船長の物語を締め括る。船長は愛する女性の幸せのために愛されたい欲求を示すのではなく、彼女を愛するが故に身を引くのだ。さらに彼は恋敵に経済的援助をした上で身を隠す。

ウォルトンの利己主義、並びに自己本位的な精神と対を成す船長の利他主義と自己犠牲的精神は、メラーも指摘する通り物語の冒頭で道徳的な基準を読者に与えている (*Mary Shelley* 109)。第三版において付け加えられた "romantic" という語が、効果的に二人のキャラクターの持つ主義と精神の対比を浮かび上がらせている。そして、この対照的な主義・精神は初版に既にある箇所だけでなく、第三版で新たに書き換えられた箇所へと密接に繋がっていく。次章では、ウォルトンと彼の利己主義と自己本位的な精神を共有するキャラクターたちに焦点を当て、初版と第三版の相違にも触れながら論じていく。

II. 怪物の条件——死への道

クリーチャーと火に関連する描写は、彼が利己的な精神に加えて利他的な精神を持ち始める過程とその破綻だけでなく、それがもたらす死苦を象徴している。インゴルシュタットの森を彷徨っていたクリーチャーは浮浪者たちの残していった火を見つける。火が彼にもたらす暖かさに感動して手を突っ

込んだ彼は、焼けるような痛みを感じてすぐに手を引っ込める。そして、火が暖かさで以て快を与える一方で、近付き過ぎると火傷させ痛みを与えるという正反対の結果をもたらすことをクリーチャーは不思議がる。火を見つけたばかりの彼は自らを暖めるためだけに薪になる枝木を集める。しかし、ド・ラセー家 (the De Laceys) の美しい利他主義と自己犠牲の精神を見た後は、貧窮する彼らの手助けをするために薪になる枝木を集めてきてやるのである。彼は利他的な精神に目覚め始める。

ド・ラセー一家の人々を愛する彼は、日を増すごとに彼らから愛されたい、共感されたいと強く望むようになる。しかし、自分の怪物的な外見故にその欲求を満たすことが出来ないと分かると、彼らの住んでいた小屋の周りに枝木を集め、火を点けて小屋を焼き尽くすのである。彼は他者への無私の愛という名の暖かさを捨て去り、代わりに破壊的な火のように復讐の人生を送り始める。

クリーチャーは愛する心を捨てたものの、愛されたいという欲求は持ち続ける。そして、自分に対する愛を拒絶したウィリアム (William) を終に殺めてしまう。彼はその後、罪をジュスティーヌ (Justine) に被せようとウィリアムが首から下げていたペンダントを彼女の服の襷に隠す。以下の第三版のみに見られる引用は、クリーチャーに関係する唯一の大きな変更点である。

“... I bent over her, and whispered, ‘Awake, fairest, thy lover is near—he who would give his life but to obtain one look of affection from thine eyes: my beloved, awake!’

The sleeper stirred; a thrill of terror ran through me. Should she

indeed awake, and see me, and curse me, and denounce the murderer? Thus would she assuredly act, if her darkened eyes opened, and she beheld me. The thought was madness; it stirred the fiend within me—not I, but she shall suffer: the murder I have committed because I am forever robbed of all that she could give me, she shall atone. The crime had its source in her: be hers the punishment! Thanks to the lessons of Felix and the sanguinary laws of man, I had learned now to work mischief. I bent over her, and placed the portrait securely in one of the folds of her dress. She moved again, and I fled.” (1831 143-44)

ジュスティースが目覚めれば殺人者だと告発されるかもしれないという狂気にも似た罪の意識が、クリーチャーの心の中に「悪鬼」(“fiend”)を呼び起こす。クリーチャーは外面的だけでなく、内面的にも怪物性を帯びる。彼の内には地獄の業火が渦巻く (1831 136)。そして、復讐を遂げたクリーチャーは北の最果てにある崇高な氷の世界で、自らの肉体と自我を炎で焼き尽くすために純黒の闇の奥へと消えていく。

クリーチャーに関する議論を締め括るには「怪物」(“the monster”)あるいは怪物性とは何かについて語らねばならない。外面的な怪物性に関してはクリーチャーの醜い肉体を想像すれば容易に理解できよう。他方で内面的な怪物性に関しては、『フランケンシュタイン』の中でジュスティースとエリザベスがそれぞれ「怪物」という語を用いて語っている。真犯人がクリーチャーにも拘らず、ジュスティースは聴罪司祭が言うように自分は人殺しの「怪物」なのではないかと思い始める。“I almost began to think that I was the

monster that he [the confessor] said I was” (1831 87). さらに冤罪だと信じていたジュステイーヌが処刑台の露に消えたことを聞いたエリザベスは、周囲の人間が血を求める「怪物」のように見えるとヴィクターに怯えながら語る。“[N]ow misery has come home, and men appear to me as monsters thirsting for each other’s blood” (1831 92). 以上より、『フランケンシュタイン』における内面的な怪物性とは生命の軽視、さらに生命を奪い去る者の野蛮な性質であると言える。

「怪物」という語に着目して、外面的並びに内面的に怪物性を帯びることがどのようなことかを示したわけだが、この「怪物」という語はもう一つの意味を内包しているように思われる。それは徹底的に他者化されることである。そして、この場合の「怪物」は自分がある集団と異なる故に「怪物」となる、あるいは「怪物」にされるのである。クリーチャーが自身の外面的怪物性に気付くのは、彼が水面に映った自分の悍ましい姿を初めて目にする時である。“I had admired the perfect forms of my cottagers—their grace, beauty, and delicate complexions: but how was I terrified, when I viewed myself in a transparent pool! At first I started back, unable to believe that it was indeed I who was reflected in the mirror; and when I became fully convinced that I was in reality the monster that I am” (1831 114). しかし、次に彼が自分のことを「怪物」だと思う際の「怪物」の定義は外面的な怪物性の時とは異なる。“When I looked around, I saw and heard of none like me. Was I then a monster, a blot upon the earth, from which all men fled, and whom all men disowned?” (1831 120). クリーチャーは自分が周囲と異なる存在故に自身を「怪物」なのではないかと疑っている。この異端的な怪物性とも言える第三

の怪物性には疎外感と孤独感が漂っている。

また、第三の怪物性は外面的並びに内面的な怪物性と大きく関連している。内面的な怪物性が当人の所業に因る一方で、外面的な怪物性に関しては、当人の意思とは関係なく当人はその性質を帯びてしまうのである。クリーチャーはその醜い肉体故に外面的に「怪物」になり、周囲の人間と容姿も含めて異なる故にさらなる怪物性を帯びるのである。そして、二重の怪物性が生み出す疎外感と孤独感、さらに自分の意思とは関係なく「怪物」として「生み出された」怒り故に、自分を庇護するはずの存在にも拘らず自分を捨てた創造主ヴィクターへの復讐に駆られて内面的な怪物性をも帯びてしまうのだ。つまり、彼は三つの意味で怪物的な存在となる。

第三の怪物性と内面的な怪物性との関連は後に考察するヴィクターにも確認出来るが、先述したジュスティーンが自身を聴罪司祭の言う通り「怪物」と思い込む様にも垣間見られる。無実にも拘らず、彼女は魔女裁判や異端審問を彷彿とさせる裁判で「人殺し」という烙印を押され、鉄格子という人工物によって「普通」の人間たちから隔離される。そして、「怪物」と化すのである。第三の怪物性もまた外面的な場合と同じく当人の意思とは関係無く、当人はその性質を帯びる。クリーチャーは「人間たちの血塗られた法」(“the sanguinary laws of man” [1831 144]) を利用して、内面的には怪物性を帯びていないはずの人間から「怪物」を創造し、怪物の条件に揺さぶりをかけるのである。

リー・ステレンバーグ (Lee Sterrenburg) も指摘している通り、メアリーはクリーチャーを非難すると同時に哀れむべき対象として描いている。⁷ クリーチャーの内面的な怪物性の要因となる生命を篡奪する残忍性にはメア

リーの批判的な態度が見受けられる一方で、彼の外面的な怪物性と第三の怪物性に漂う決して消えることのない疎外感と孤独感には彼女の哀れみの心が感じられる。この「怪物」という語に対するメアリーの二つの異なる思いが、三重に怪物性を帯びることになるクリーチャーへの非難と哀れみに繋がっている。クルックの問いにもあったが、内面的にも怪物性を背負わされることになるクリーチャー自身に対してメアリーは第三版で批判的になっているというよりも、彼女はクリーチャーを内面的にまで「怪物」に変えた彼自身の精神も含めた怪物的な男性的原理に批判の矛先をより鋭く向けているように思われる。ここから先はその怪物的な男性的原理に論の焦点を絞っていく。

クリーチャーが他者からの愛と共感を希求したように、ヴィクターもまた愛されたいという欲求を持つ。ただし彼の望む愛は歪んでいる。古の錬金術にのめり込んだヴィクターは、人類を病と死から無縁のものにするという崇高な野望を持つようになる。彼の野望は純粹なものとは言い難いが、人類のためを考えているという意味で利他的な精神があることは確かである。しかし、彼の野望も恐ろしい研究と実験を進める内に次第に利己的なものに成り果てていく。生命の神秘を終に解き明かした彼は家族や友からの愛に背を向け、従属的な愛と称賛を求めてクリーチャー創造を計画する。「新たな種」(“[a] new species”)に彼が求めたものは、自分を創造主や父としてもてはやす崇拜の心であった。“A new species would bless me as its creator and source; many happy and excellent natures would owe their being to me. No father could claim the gratitude of his child so completely as I should deserve theirs” (1831 54). 彼が当初抱いていた人類を救いたいという利他的な思いは

最早ここには無い。崇高な精神に潜む野心や自惚れといった「不純物」(“alloy” [1831 56]) が歪んだ愛の渴望と合わさり、彼の創造行為は自分の欲求を満たすための利己的なものとなる。身近にあったはずの「家庭的愛情」(“domestic affections” [1831 56]) と対等な間柄で結ばれる「共感」(“sympathy” [1831 30]) に背を向けて従属的な愛を選んだ上に、その愛さえも捨て去ったことでヴィクターは後戻り出来ない状態へと堕ちていく。

クリーチャー創造のため、ヴィクターは解剖用の死体を切り刻み、生きた動物を虐待するといったように生命の神秘を探ることとは矛盾する行為を続ける。そして、仕舞いには生命を与えることに成功したにも拘らず、クリーチャーを平気で捨て去るのだ。⁸ ヴィクターの精神はクリーチャー創造時から内面的に怪物性を帯びていたと言えよう。その後も彼は “I ardently wished to extinguish that life which I had so thoughtlessly bestowed” (1831 92) といったように生命を軽んじる発言を繰り返す。見捨てられたクリーチャーはヴィクターの生命を弄ぶ態度を糾弾する。“How dare you sport thus with life?” (1831 99).

クリーチャー創造後、罪の意識はヴィクターを追い詰めるクリーチャーのように彼の心から決して離れることはない。第三版のヴィクターは初版よりも罪の意識に悶えて、病的で時には狂氣的でもある。クリーチャーと再び相見えたヴィクターは、ウィリアムを殺害したのがクリーチャーだと確信する。しかし、八フィートもの巨体にも拘らずクリーチャーを目撃した者は誰もおらず、ヴィクターは自分自身が信じられなくなる。彼は人にクリーチャー創造の話をすれば彼らが自分を狂人だと思うのではないか、あるいは自分は本当に狂っているのではないかと恐れ、自分の中に存在するかもしれ

ない狂気を創造の秘密と共にひたすらに隠そうとする。“This was strange and unexpected intelligence; what could it mean? Had my eyes deceived me? And was I really as mad as the whole world would believe me to be, if I disclosed the object of my suspicions? I hastened to return home, and Elizabeth eagerly demanded the result” (1831 86). 初版の同じ箇所にはヴィクターの内面描写は一切見られない。“When I returned home, Elizabeth eagerly demanded the result” (1818 65). 自分は狂っているのかいないのか、真実を話すべきか否かといった複雑に絡まりあう内面の葛藤が第三版には巧みに描かれている。

内面的に怪物性を負ったヴィクターは他者との間に越えられない壁を感じ始める。“I saw an insurmountable barrier placed between me and my fellow men; this barrier was sealed with the blood of William and Justine” (1831 158). さらに罪の意識と狂気が他者からの共感を遮断し、彼は家族や友に気付かれることなく独り疎外された存在へとようになっていく。その過程で彼はクリーチャー同様に絶対的な孤独の苦しみを味わう。彼は今や第三の怪物性も帯びているのである。全ての絆を失った彼は、ウォルトンに人は皆不完全な生き物で、友の愛に頼らざるを得ないのだと語る。“[W]e are unfashioned creatures, but half made up, if one wiser, better, dearer than ourselves—such a friend ought to be—do not lend his aid to perfectionate our weak and faulty natures” (1831 28). この第三版で変更された箇所は、初版に既出の同じくヴィクターがウォルトンに完全な人間というのは「家庭的愛情」を持たなければならないと語る箇所と対を成して、相互的な愛の大切さを訴えかけている。

第三版でヴィクターとの近似性がより明確になったウォルトンの性質にも変更が加えられている。両者の近似性が最も明らかになるのは、ウォルトンがヴィクターに自らの理想を語る場面においてである。“I would sacrifice my fortune, my existence, my every hope, to the furtherance of my enterprise. One man's life or death were but a small price to pay for the acquirement of the knowledge which I sought; for the dominion I should acquire and transmit over the elemental foes of our race” (1831 28). ウォルトンが人類の利益のためなら人ひとりの命など犠牲にしてもいいと考えている点や、自然を支配すべき対象と見做している点などヴィクターと非常に似通っている。第三版のウォルトンの精神には怪物性の萌芽が存在する。

ウォルトンもまたヴィクターのように人類の恩恵のためという利他的かつ自己犠牲的な大義名分を掲げるものの、そこには名声欲と支配欲を満たすための利己心が垣間見られる。ウォルトンの計画自体は一見自己犠牲的で利他的に見えるが、彼は心の奥で「榮譽」(“glory”)という名の見返りを求めている。“My life might have been passed in ease and luxury; but I preferred glory to every enticement that wealth placed in my path” (1831 17). 寓意的なヴィクターの自我拡大と侵犯行為に比べ、ウォルトンの場合はより現実的と言えよう。⁹ さらに第三版では、ウォルトンの事例に限らず、クラーヴァル (Clerval) とアーネスト (Ernest) の書き換えが行われたことで、自我拡大と侵犯行為のもたらす脅威の可能性は初版よりも現実味を帯びた身近でリアルなものになっている。

初版では平板なキャラクターに留まっていたクラーヴァルは、第三版でアジアとの貿易を狙う事業者という肩書きが与えられることになる。クリー

チャーと交わした約束を果たすため、ヴィクターがイギリスに旅立つ際にクラヴァルも同行する。第三版では、クラヴァルに事業者たちとの交渉のためイギリスを訪れるという目的が与えられることによって彼の同伴がより自然な流れとなっている。

He was also pursuing an object he had long had in view. His design was to visit India, in the belief that he had in his knowledge of its various languages, and in the views he had taken of its society, the means of materially assisting the progress of European colonisation and trade. In Britain only could he further the execution of his plan. (1831 158)

初版の時点で、クラヴァルは既に東洋に目を向けていて、いつかアジア諸国を冒険するためペルシャ語、アラビア語、サンスクリット語といった東洋の言語の研究を大学で行っていた (1831 69)。クラヴァルの掲げる目標は第三版においてより現実味を帯び、詳細に語られる。彼は英雄から冒険家、さらには事業者としてイギリス・インド間貿易に携わる現実的な人生を歩む人間へと変化していく。次の第三版からの記述は、彼のイギリス・インド間貿易の計画をより詳細に浮かび上がらせるだけでなく、当時の読者に否応なくイギリス東インド会社を想起させたことであろう。“He said that he was wearing away his time fruitlessly where he was; that letters from the friends he had formed in London desired his return to complete the negotiation they had entered into for his Indian enterprise” (1831 169-70). このように順に見ていくと、彼が大学でサンスクリット語を学んでいたことがインドでの貿易事業に繋がってくることから、第三版のクラヴァルに関す

るプロット展開の方が初版よりも一貫していると言えるだろう。

初版では自然を愛する理想的なキャラクターであったクラーク・ヴァルも、植民地政策を支える帝国主義的な人物へと書き換えられたことで一概に理想的な人物とは言い難くなった。例えばこの書き換えに関して、廣野由美子は彼をヴィクターとウォルトンと同列に扱い、批判的に解釈している。「クラーク・ヴァルのインド行きをはじめ、フランケンシュタインの人造人間製作やウォルトンの北極探検もまた、ヨーロッパ人による侵犯行為として位置づけるならば、この作品における帝国主義的侵犯はすべて挫折に終わるのである」(廣野 217)。

クラーク・ヴァルに比べて作中での言及は少ないものの、アーネストも第三版で大きな変化を遂げる。初版のアーネストは病弱で、エリザベスから将来は農夫に、アルフォンスからは判事になるように言われていた。しかし、第三版の彼は健康な肉体を手に入れ、自らの意思で兵士になり外国部隊に入隊したいと家族に告げる。“He is . . . full of activity and spirit. He is desirous to be a true Swiss, and to enter into foreign service” (1831 64). クルックはこの変更に関して、物語の舞台の18世紀末のスイスと言えば金次第で誰にでも身売りする傭兵産業が盛んで、アーネストがヨーロッパでの領土拡大を狙うナポレオン (Napoléon) の帝国主義的戦争に加担する可能性は十分にあると指摘している (Crook 7)。

人類の恩恵を約束するプロメテウスの自己犠牲の精神と利他主義の仮面の下には、満たされることのない様々な欲望が渦巻いていることをメアリーは暴き出す。彼女は日記に利己主義に毒された男たちは永遠に彼らにとっての目的を追いつめ続けることだろう、“because those ends cannot be satisfied”

(MSJ 488) と記している。終わりのなき欲望が自我拡大と侵犯行為を引き起こし、終には他の生命をも脅かす。崇高だった精神は狂気を帯び、怪物性へと墮落する。そして、その行き着く先は死である。第三版で改めてメアリーは現実性をより滲ませながら、国民、国家、そして人類への恩恵を標榜する献身的な利他主義に潜む利己主義、そして尽きることのない自我の拡大の脅威とその悲劇的な末路を描いている。最終章では利己主義と自己本位的な精神とは対極にある利他主義と自己犠牲の精神が、第三版でより一貫して描かれていることを明らかにする。

Ⅲ. 英雄の条件——生への道

船長の利他主義と自己犠牲の精神は様々なキャラクターによって体现され、より発展されていく。その変遷を辿る際に「英雄」(hero) という語が鍵になる。初版と第三版には二つのタイプの英雄が登場する。第三版でより明確に描き分けられる両英雄像の原型を初版の時点で体现するのは、ヴィクターとエリザベスである。ヴィクターはクリーチャー搜索の協力を依頼した判事の消極的な発言に激昂する。そして、判事には自分の持つ献身の心と英雄性が欠けていると失望する。“But to a Genevan magistrate, whose mind was occupied by far other ideas than those of devotion and heroism, this elevation of mind had much the appearance of madness” (1831 200-01). 彼は自らが創造したクリーチャーを怪物と見做して、自分のことをあたかもそれを退治する英雄のように思い込んでいる。上の引用で英雄の気質が献身の心と並置されていることは、英雄性の定義を考察する上で重要なことである。さらに興味深いのは、ヴィクターの示す英雄性が狂気を孕んでいるということ

だ。

次に英雄という語が類似した意味で用いられるのは、氷が解けたら進路を南に変更するようウォルトンに詰め寄る船員たちに向かってヴィクターが叱咤激励する場面においてである。ヴィクターは逃げ腰の船員たちに英雄としての生き様を以下のように説く。

“... You were hereafter to be hailed as the benefactors of your species; your names adored as belonging to brave men who encountered death for honour, and the benefit of mankind . . . Oh! be men, or be more than men. Be steady to your purposes, and firm as a rock. This ice is not made of such stuff as your hearts may be; it is mutable, and cannot withstand you, if you say that it shall not. Do not return to your families with the stigma of disgrace marked on your brows. Return, as heroes who have fought and conquered, and who know not what it is to turn their backs on the foe.”

He spoke this with a voice so modulated to the different feelings expressed in his speech, with an eye so full of lofty design and heroism. (1831 214-15)

ここでヴィクターが思い描く英雄も、敵を駆逐することを誇りにする男性的かつ攻撃的な存在である。文字通り命を捧げ、栄誉と人類への恩恵のために敵（自然）を征服することが英雄の条件と見做されている。この英雄には狂気だけでなく絶えず死の影が付きまとう。

もう一方のタイプの英雄像はこれとは異なる。ジュスティーンへの怒りを露にする傍聴人たちの前で、彼女の無実を信じて証言台に立ったエリザベス

を形容する際の「英雄的」(“heroic” [1831 91])という語には、彼女の献身の心が色濃く滲み出ている。エリザベスにとって義理の弟に当たるウィリアムが殺害された事実を考えれば、ジュスティーンを弁護することで、もしかすると誹りを受ける恐れがあるにも拘らずエリザベスは彼女の無罪を熱弁する。エリザベスを形容する英雄的という語は先程の英雄の持つ攻撃性、狂気、死とは無縁である。寧ろ、エリザベスは目の前にいる一人の人間の命を守ろうとしている。そして、その守る対象が弱者(四面楚歌の無実の女性)である点も見逃すことは出来ない。

以上のように両英雄像の基盤には自己犠牲の精神がある一方で、初版の時点で両者には既に異なる性質が与えられている。攻撃的で狂気と死と紙一重にある男性的な英雄像と、弱者を守り、命を尊重する女性的な英雄像といったように。ただし、両英雄像の対比の度合いと両者が象徴する主義・精神は、初版の時点ではまだ明確とは言えない。男性的な英雄像がその特徴をほとんど変えずに第三版で再び描かれるのに対して、女性的な英雄像は第三版で傷付いた者たちを看護する行為と結び付く。看護行為は『フランケンシュタイン』の初版の時点から繰り返し見られるモチーフである。数え上げると第三版では九度も繰り返されている。これだけ反復される看護行為が何を意味するのかを暫し立ち止まって考えてみる必要がある。¹⁰ 看護する人間の適性に関して、第三版には新たな記述がある。インゴルシュタットでクラヴァルがヴィクターを看護している際に送られてきたエリザベスからの手紙の中で、彼女はヴィクターを看護しているのが「報酬目当ての年老いた看護婦」(“mercenary old nurse” [1831 64])ではなくて良かったと安堵している。なぜならこういった報酬目当ての人間には「気遣い」(“care” [1831 64])も

「愛情」(“affection” [1831 64]) も無いのだから、と彼女は続けて綴る。この手紙の記述に一致するような金で雇われた看護婦は、アイルランドで意識を失ったヴィクターに付き添うことになる。彼女はヴィクターの病状に対して終始無関心で、患者を生へと導くべきはずの彼女は彼が死んだ方がましだったとまで彼に言い放つ (1831 177-78)。エリザベスの手紙とアイルランドの老婆の例から読み取れるのは、看護行為に私利私欲の情が入り込めば、それは最早傷付いた者を生へと導く看護行為が本来持つ役目を成さないことである。そして、『フランケンシュタイン』において献身的に看護する行為は、看護する側からされる側への無償の愛の象徴として機能している。

献身的な看護を行う者たちの中で、第三版で女性的な英雄像に最も当てはまるのはキャロライン (Caroline) である。初版において病から回復したエリザベスのもとに駆け付けるだけであった彼女は、第三版でエリザベスの看病をするように書き換えられている。初版ではエリザベスの雇う猩紅熱は決して重いものではなく、彼女はすぐに回復の兆しを見せる。それを聞いて居ても立っても居られなくなったキャロラインは病室に入って病に感染してしまうのである (1818 26)。

初版におけるキャロラインの悪く言えば軽率な性格に比べて、第三版の彼女は愛する娘を命懸けで守ろうとする自己犠牲的なキャラクターに書き換えられている。まず、エリザベスの病は重度のものへと変更されている。母は感染の危険を冒して、この重い猩紅熱に苦しむ我が子の命を助けるために家族の制止も振り切って必死に看病するのである。“[W]hen she heard that the life of her favourite was menaced, she could no longer control her anxiety. She attended her sickbed,—her watchful attentions triumphed over the malignity

of the distemper,—Elizabeth was saved, but the consequences of this imprudence were fatal to her preserver. On the third day my mother sickened” (1831 42-43). 母の懸命の看病は悪性の病に打ち勝ち、エリザベスは無事回復するのだが、母は病に感染して命を落としてしまう。以上のように、初版のエリザベスに垣間見られた自己犠牲の精神に基づき、弱い立場にある者の命を守り抜こうとする英雄像はその後、看護行為と結びつき、第三版のキャロラインによって体现されている。

ここで「英雄」(hero)の語源に注目すると、さらに興味深いことが判明する。『英語語源辞典』には“hērōs”というギリシア語がその語源とされており、このギリシア語が天后や守護女神を意味すると説明が為されている。さらに *The American Heritage Dictionary of the English Language* によると“hero”の“her”がラテン語の接辞“ser”から由来していて、同書の“Appendix”には、この“ser”が現代英語の“reserve,” “conserve,” “preserve”や“observe”の中でも用いられているとある。この接辞の“ser”は元々「守ること」(“to protect”)を意味して、先程挙げた英雄のギリシア語には“the protector”の意味もあると記されている。このように見ると、「英雄」(hero)が元来女性的な存在で、守護する者を意味していたことが伺える。つまり、初版のエリザベスが原型となる女性的な英雄像は、原点回帰する形で起源的な英雄の条件に合ったものとなっている。男性的な英雄像に対して、メアリーは「新たな」と言うよりは寧ろ、元来の英雄を定義する性質を帯びたキャラクターを造り出している。「新たな」英雄とは、自己犠牲の精神に基づいて、目の前にある一つの命を重んじ、弱い立場にある者たち(殊に怪我や病に苦しむ者たち)を看護する(愛する)ことで守り抜こうとする者たちのことであった。

第三版のキャロラインがエリザベスを看護する箇所に加えて、エリザベスがフランケンシュタイン家に養子にもらわれる場面に変更が施されたことで、初版では点々と孤立していた弱者を守る精神や自己犠牲の精神を表す挿話が結び付けられて、その精神が受け継がれていく様を作品の中に読むことが可能となる。キャロラインにとって唯一の絆の父ボーフォールを病で亡くし彼女が悲嘆に暮れている時、ボーフォールとは友の間柄であったアルフォンスがまるで彼女の「守護精霊」(“a protecting spirit”)のように現れる(1831 32)。この場面は初版に既に存在するが、次のアルフォンスがキャロラインを妻に迎えて、辛い経験をした彼女を懸命に守り抜く彼の姿の描写と、その後キャロラインがエリザベスを養子に迎える場面は第三版にしか存在しない。“He strove to shelter her, as a fair exotic is sheltered by the gardener, from every rougher wind, and to surround her with all that could tend to excite pleasurable emotion in her soft and benevolent mind. Her health, and even the tranquillity of her hitherto constant spirit, had been shaken by what she had gone through” (1831 33).

アルフォンスのこの慈愛に満ちた庇護の精神をキャロラインは受け継ぎ、貧しい者たちのもとを訪れて彼らの「守護天使」(“the guardian angel”)になろうと努める。“Their [Alphonse and Caroline's] benevolent disposition often made them enter the cottages of the poor. This, to my mother, was more than a duty; it was a necessity, a passion,—remembering what she had suffered, and how she had been relieved,—for her to act in her turn the guardian angel to the afflicted” (1831 34). 子供たちに十分な食事を与えられないでいる貧しい農民の家を訪れた際、キャロラインはその内の一人を養子に迎え、娘として

育てることに決める。この娘が後にキャロラインによって瀕死の病から救い出されるエリザベスである。命を救われたエリザベスは、受け継いだ庇護と自己犠牲の精神を胸にジュスティーヌ弁護のために証言台に立つ。

ジュスティーヌもまた庇護と自己犠牲の精神の継承者である。彼女もエリザベス同様にキャロラインの庇護を受ける。実母に厄介者扱いされていた彼女をキャロラインは召使いとして抱えてやり、愛情を注ぐ。ジュスティーヌはキャロラインを「庇護者」(“protectress” [1831 65])として敬慕して、彼女が猩紅熱に罹った際には自分も重い病気を患っているにも拘らず、献身的な看病をする(1831 65)。さらに彼女は、自分を全く愛そうとはしなかったモーリッツ夫人(Madame Moritz)さえも看病するのだ。“She nursed Madame Frankenstein, my aunt, in her last illness, with the greatest affection and care; and afterwards attended her own mother during a tedious illness, in a manner that excited the admiration of all who knew her” (1831 84)。彼女はキャロラインから「新たな」英雄の精神を受け継ぐ者である。

このように初版では点在していた庇護と自己犠牲の精神を表す挿話が第三版において結びつき、その精神が夫から妻へ、母から娘たちへと受け継がれていく様が巧みに描かれているのが見て取れる。ヴィクターやクリーチャーに関する記述に比べれば格段に少ないものの、第三版で「新たな」英雄となるキャロラインとジュスティーヌは船長の示した道徳的基準を引き継ぐだけでなく、庇護の精神という新たな側面を備える。「新たな」英雄の条件となる性質、つまり自己犠牲の精神、生命を尊重する精神、弱者を庇護する精神は第三版において初版以上に高らかに謳われていることは確かである。

結論

キャラクター造形と心理描写に関しては、ヴィクターの狂気を帯びた苦悶の様子が第三版におけるより洗練された筆致を証明するであろう。また、クラヴァルが貿易事業者になる過程の描写に加えて、アルフォンスの庇護の精神から始まりキャロライン、エリザベス、そしてジュスティースの自己犠牲の精神へと続く一連の継承の流れは第三版のプロット展開の秀逸性を示すはずだ。そして、メアリーはこの改変されたプロット展開で以て、初版に徹底して描かれていた男性的原理の脅威と挫折に加え、男性的原理の対極にあるとも言える主義・精神を第三版でより明確に提示している。

多くのロマン派詩人と交流を持ち、男性的原理がその中心にあるロマン主義の時代を生き抜き、その終焉までを女性の視点で見届けたからこそ、メアリーは人類への恩恵を謳う利他主義と自己犠牲の精神に潜む終わり無き欲望の存在を誰よりも敏感に感じ取ることが出来たのであろう。生命を愛することを忘れ、ただ愛されることだけを望み続ける満たされることのない欲望は自我拡大と他者侵犯をもたらす。それによって崇高だった精神は歪み、生命をも脅かすことになるその精神は怪物性を帯びて、終には死を迎える。第三版で改めて彼女は、この一連の脅威をより現実味を帯びさせて描き切っている。そして、プロメテウスの仮面を剥ぎ取るだけに留まることなく「不純物」の無い自己犠牲の精神に、弱者庇護の精神と生命尊重の精神を付与することで、メアリーは「新たな」英雄像を第三版のより洗練されたプロット展開で以て確立している。従って第三版は、初版以上に「怪物」を生み出しうる男性的原理への批判精神が明確化されているに留まらず、批判対象と対極にあるメアリー独自の思想が一貫した形で打ち出されていると言えるだろ

う。

註

1. 本論文は同誌に掲載された二つの研究ノートに基づいている。『『フランケンシュタイン』の1818年版と1831年版の比較分析——新旧2つの序文と第1巻に関して——』と『『フランケンシュタイン』の1818年版と1831年版の比較分析——第2巻と第3巻に関して——』を参照。
2. 本論文では M. K. ジョゼフ (M. K. Joseph) 編集の第三版をテキストとして用いる。そして初版にしかない箇所に関しては、マリリン・バトラー (Marilyn Butler) 編集のテキストより引用する。
3. 各版の出版経緯に関してはチャールズ・E・ロビンソン (Charles E. Robinson) の “Texts in Search of an Editor: Reflections on *The Frankenstein Notebooks* and on Editorial Authority” を参照。
4. 例えば、メアリー・プーヴィー (Mary Poovey)、アン・K・メラー (Anne K. Mellor)、クリス・ボルディック (Chris Baldick)、ジェームズ・オールーク (James O'Rourke)、市川純がいる。
5. クルックはビカリング版に初版を採用しているが、第三版を劣ったテキストとして捉えること自体には疑問を呈している (Crook 3-4)。エリザベス・A・ボールズ (Elizabeth A. Bohls) もまた第三版が劣ったテキストであると判断することには反対している (Bohls 288)。クルックとボールズは第三版が初版よりも劣ったテキストだということに反対はしているものの、第三版が初版よりも優れたテキストだとは言っていない。第三版を初版よりも優れたテキストだと明確に示した意見は未だに無いと思われる。
6. 版の比較を行った研究者の中でクルックだけが唯一、キャラクターの心理描写に言及している。但し、彼女はヴィクターとクリーチャーの「心理的な複雑さ」 (“psychologically complex” [Crook 3]) が増したと言うに留め、具体的な箇所の比較並びに分析は行っていない。

7. ステレンバーグの場合は、そこに政治的な解釈を与えている。彼はメアリーがクリーチャーの中に、フランス革命の群衆に対するパーク的な憎しみと共和主義的な哀れみという両極的な観点を融合させていると指摘している (Sterrenburg 165-66)。
8. ヴィクターがクリーチャーをその醜さから平気で捨てるだけでなく、そのクリーチャーのための女性クリーチャー創造も途中でやめてしまう一方で、メアリーは自らの手で作り上げた『フランケンシュタイン』という作品を「醜い我が子」(“my hideous progeny”)と呼びながらも、それを愛し、それが世に広まってくことを願う。“And now, once again, I bid my hideous progeny go forth and prosper. I have an affection for it” (1831 10). そして、メアリーはこの“progeny”という特異な語をヴィクターにも第三版で語らせている。

By one of those caprices of the mind, which we are perhaps most subject to in early youth, I at once gave up my former occupations; set down natural history and all its progeny as a deformed and abortive creation; and entertained the greatest disdain for a would-be science, which could never even step within the threshold of real knowledge. (1831 41)

落雷によってオークの木が焼き尽くされるという衝撃的な出来事を見た後で、ヴィクターは今まで崇拝していた錬金術師たちの業を似非科学と呼び、それらを捨て去る。これは後に、インゴルシュタットにて狂気にも似た熱意で創造していたクリーチャーに一瞬で嫌悪を抱き、彼を捨て去る場面を思い起こさせる。第三版で新たに加えられた“progeny”という語は、メアリーの「我が子」への愛とヴィクターの無慈悲な心との対比へと導き、ヴィクターの生命への軽視、「我が子」を愛せない心への批判を暗示している。この語に関しては先述の研究ノートの中でより詳しく扱っている。

9. ウォルトンは北極で「磁力の秘密」(“the secret of the magnet” [1831 16])を解き明かす計画を手紙に記す。彼のこの計画を想起させるような偉業が第三版の出版と同じ年の六月一日に成し遂げられる。ジェームズ・クラーク・ロス (James

Clark Ross) 率いる探検隊によって「北磁極」(“the north magnetic pole” [Ross 165]) が発見されたのであった。そして、この約五ヵ月後に第三版が出版される。第三版の読者にとって、ウォルトンの計画は決して夢物語として片付けられなかったはずであろう。

10. 十九世紀イギリスにおける看護の詳細はブーヴィーの *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* を参照。

引用・参考文献

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing*. Oxford: Clarendon P, 2001. Print.
- Bohls, Elizabeth A. *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818*. Cambridge: Cambridge UP, 1995. Print.
- Crook, Nora. “In Defence of the 1831 *Frankenstein*.” *Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner*. Ed. Michael Eberle-Sinatra. Houndmills, Basingstoke: MacMillan P, 2000. 3-21. Print.
- Feldman, Paula R., and Diana Scott-Kilvert, eds. *The Journals of Mary Shelley*. Vol. 2. Oxford: Clarendon, 1987. 2 vols. Print. (Abbr. *MSJ*)
- Mellor, Anne K. “Choosing a Text of *Frankenstein* to Teach.” *Approaches to Teaching Shelley's Frankenstein*. Ed. Stephen C. Behrendt. New York: The Modern Language Association of America, 1990. 31-37. Print.
- . *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York: Routledge, 2009. Print.
- Morris, William, ed. *The American Heritage Dictionary of the English Language*. Boston: American Heritage & Houghton Mifflin, 1973. Print.
- O'Rourke, James. “The 1831 introduction and Revision to *Frankenstein*: Mary Shelley Dictates Her Legacy.” *Studies in Romanticism* 38.3 (Fall 1999): 365-385. Print.
- Poovey, Mary. “‘My Hideous Progeny’: The Lady and the Monster.” *Modern Critical Interpretations: Mary Shelley's Frankenstein*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea

- House, 1987. 81-106. Print.
- , *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*. Chicago: U of Chicago P, 1988. Print.
- Robinson, Charles E. "Texts in Search of an Editor: Reflections on *The Frankenstein Notebooks* and on Editorial Authority." *Textual Studies and the Common Reader: Essays on Editing Novels and Novelists*. Ed. Alexander Pettit. Athens: U of Georgia P, 2000. 91-110. Print.
- Ross, M. J. *Polar Pioneers: John Ross and James Clark Ross*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's UP, 1994. Print.
- Shelley, Mary. *Frankenstein or the Modern Prometheus*. Ed. M. K. Joseph. Oxford: Oxford UP, 2008. Print. (Abbr. 1831)
- , *Frankenstein, or The Modern Prometheus*. Ed. Nora Crook. London: William Pickering, 1996. Print. Vol. 1 of *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Nora Crook with Pamela Clemit, gen. eds. 8 vols. 1996.
- , *Frankenstein or the Modern Prometheus: The 1818 Text*. Ed. Marilyn Butler. Oxford: Oxford UP, 2008. Print. (Abbr. 1818)
- Sterrenburg, Lee. "Mary Shelley's Monster: Politics and Psyche in *Frankenstein*." *The Endurance of Frankenstein: Essays on Mary Shelley's Novel*. Eds. George Levine and U. C. Knoepfelmacher. Berkeley: U of California P, 1982. 143-71. Print.
- 市川純 「改訂版が生み出す『フランケンシュタイン』の新たな解釈」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊13号-1 (2005. 9): 339-49.
- 岡隼人 「『フランケンシュタイン』の1818年版と1831年版の比較分析——新旧2つの序文と第1巻に関して——」『core』42号 (2013): 39-90.
- , 「『フランケンシュタイン』の1818年版と1831年版の比較分析——第2巻と第3巻に関して——」『core』43・44合併号 (2015): 33-88.
- 寺澤芳雄編 『英語語源辞典』東京、研究社、1997.
- 廣野由美子 『批評理論入門——「フランケンシュタイン」解剖講義』東京、中公

新書、2005.